連載〈まつやま　人・彩時記〉㉒

明治の青春群像
秋山兄弟と子規・拓川そして定謨（さだこと）伯

元松山市素鵞小学校長
伊予史談会会員
上岡　治郎

松山城山（勝山）および市街の遠望（北西方面からの航空写真）

松山城本丸全景（北西方面から眺む、右端は乾櫓）

一、はじめに

平成14年は「松山城四百年祭」という記念すべき年に当たり、松山城を舞台とした多彩な記念行事が実施されたのである。

そして、一三二メートルの山頂にそびえる松山城の素晴らしさと、築城開始から四百年という歴史の重みを、松山市民はもとより観光客の多くの人たちが感じたことと思う。

松山や　秋より高き　天主閣

この俳句は正岡子規が明治24年に帰省した時に作ったもので、澄みきった秋空にそびえ立つ松山城のすばらしさを詠んだものである。

二、松山藩の歴史

（ここでは、いろいろな書物の引用によって論を進めることにする。）

①「松山城史」（景浦　勉著）

初版本は昭和14・6・3発行。ここに紹介するのは、平成7・3・1改補六版のものである。

目　次

はじめに
一　加藤嘉明の入国と松山築城
二　蒲生忠知の就封と藩政の動揺
三　松平定行の入部と守成の事業
四　松平定直の施政と松山文化の誕生
五　享保の大飢饉と久万山農民騒動
六　儒教各派の発達と文運の進展
七　栗田樗堂一派の俳諧復興運動
八　松平定通の藩政改革と明教館の創設
九　松山城郭復興事業の完成
一〇　幕末における松山藩の動静と長州征伐
一一　明治維新の展開と松山藩の苦悩
一二　明治初期の松山藩と城郭の変遷
参考のために
松山城・本丸略図
（付）城下町の変遷

そしてこの本では、松山藩の歴史を次の三時期に大別している。

1加藤嘉明時代（治世　二七年）
2蒲生忠知時代（治世　七年）
3松平家時代　（治世二三五年）

②「久松定武は語る」（昭和60・4・29刊）

―八十六歳の誕生日を迎えて―

この本は、戦後、愛媛県知事を長く務められた久松定武氏が語られる思い出話を、十数回にわたって録音し、有志の手によって自叙伝的にまとめたものである。

そして、久松家の先祖の話では、徳川家康の異父弟である松平定勝の子、松平定行が松山藩初代藩主となって活躍した様子が具体的に書かれている。

それから幕末動乱期の松山藩主勝成・定昭時代に、徳川家の親藩であったために朝敵となり、朝廷軍と戦うか、城を明け渡して恭順の意を表すかということでも、ずい分苦しんだものである。

そして定武氏は、その結論として次のように述べている。

「わたしが、非常にうれしく思っていることは、先祖が松山の藩主になってから、一度も（松山で）戦争のなかったことです。初代藩主、定行から約二百五十年もの間、松山は平和でした。これは全国でもまれなことです。

この間で、いちばん危なかったのが、この勝成（かつしげ）の治世でした。それを沈着に切り抜けました。

…（中略）…これは、土佐藩主山内豊信（とよしげ）がいろいろ松山のことを思ってくれたことと、松山城を謹んで明け渡し、決して戦争はしないと決意した勝成・定昭のおかげです。わたしの祖母は、山内豊信の姪でした。朝敵の松山藩を征伐せよとの命を受けた豊信は、なんとかして戦争をしないようにと考えました。急いで松山に兵を出すと同時に、話し合いで城を受け取り、町々を守るように命じました。一日違いで、松山は戦争にはなりませんでした。」

③「名将秋山好古」（生島　寿著）

土佐藩に占領されたことによって、長州藩兵との戦いは防げたものの、この本には次のような松山藩の苦難の歴史が書かれている。

「慶応四年（一八六八年）五月になると朝廷から『勤皇実行のため』として、戊辰戦争の軍費十五万両の献金を命ぜられた。

この膨大な出費のため、藩士の俸禄は大幅に削られた…。」

ところで私は、歴史年表によって大きな歴史の流れを列挙する。

慶応4・1・3　鳥羽・伏見の戦い
〃　4・1・17　王政復古を通知
〃　4・3・14　五箇条の御誓文
〃　4・4・11　江戸城開城
〃　4・7・17　江戸を東京と改称
明治元・9・8　明治と改元
〃　元・9・20　東京行幸

〃 4・7・14 廃藩置県
〃 4・7・18 文部省設置

三、明治の青春群像

①「坂の上の雲」

司馬遼太郎氏の名著「坂の上の雲」の最初の目次は「**春や昔**」である。これは子規が明治28年に作った俳句で、

春や昔十五万石の城下かな

と、伊予松山ののびやかな人情や風景をうたいあげているのに対し著者が共鳴すると共に、これから登場する三人の主人公が松山藩十五万石の武士の子であることを予測させようとしている工夫とも思われるのである。

正岡子規

秋山好古

秋山真之

しかし私は、この正岡子規・秋山好古・秋山真之の三人の上に次の二人（加藤拓川・久松定謨）を加えたいのである。

②5人の生年月日（旧暦）

1 秋山好古　安政6・1・7（一八五九）
2 加藤拓川　安政6・1・22（一八五九）
3 久松定謨　慶応3・9・9（一八六七）
4 正岡子規　慶応3・9・17（一八六七）
5 秋山真之　慶応4・3・20（一八六八）

③5人の上京した日（年齢は数え年）

1 秋山好古　明治10・3（19歳）
2 加藤拓川　明治8・9（17歳）
3 久松定謨　明治5・7（6歳）
4 正岡子規　明治16・6・15（17歳）
5 秋山真之　明治16・9（16歳）

④5人の初めて海外に出た日

1 秋山好古　明治20・7・23（フランス）
2 加藤拓川　明治16・11・9（フランス出発）
3 久松定謨　明治16・11・9（フランスに出発）
4 正岡子規　明治28・5（中国）
5 秋山真之　明治26・6（イギリス）

―次にお借りした資料をもとに5人の横顔を紹介する―

⑤秋山好古

伊予松山の生んだ世界的英雄、秋山好古大将は日本陸軍の父といわれ、幼名を信三郎といい、父秋山久敬の三男として中徒行町に生まれる。松山藩の下級武士であった秋山家は、明治維新により貧しい生活をするに至る。

親孝行であった好古は、7、8歳ころから近所の風呂屋の風呂たきや米搗きなどをして勉学に励んだ。18歳の時大阪に出て師範学校へ進み、教師をしていたが創設されたばかりの陸軍士官学校に入り日本騎兵の育ての親となり、日露戦争では世界最強のコザック騎兵軍団と闘って勝ち、陸軍大将となる。しかし退官後は松山の北予中学校長として死の直前まで勤める。

⑥加藤拓川

正岡子規の伯父で、子規の思想人格の形成に大きな影響を与えた拓川は、明教館の教授大原観山の三男で幼名を忠三郎、本名を恒忠と言って、子規より8歳年長であった。明治8年観山が没すると東京に出て司法省法学校に入学し、そこで原敬・陸羯南・国分青厓・福本日南など終生の良友を得る。

また中江兆民の塾に入ってフランス語を学び、明治16年11月、久松定謨に従ってフランスに留学、外交畑に入り、大使などの仕事をした後、新聞社社長や衆議院議員貴族院議員の仕事をし、郷党に頼まれて第5代の松山市長となり、北予中学校・松山高商の創立発展に努力し、城山の松山市への払い下げ等に努力し、食道ガンのために永眠。子規のため、国のため、郷土のために尽くした一生であった。

右から久松定謨・秋山好古・加藤拓川

⑦久松定謨（伯爵）

明治5年、藩主であった久松定昭が病気になったため、6歳の定謨が久松家の養子となる。

明治維新になるまでは、養子は大名家から来ていた。しかし維新後は血筋のつながった親戚からということで定謨が久松家を継ぐ事になったのである。

そして明治16年フランスに留学した時には前半を加藤拓川、後半を秋山好古がお付きとなって無事フランスの士官学校を卒業し、帰国後陸軍少尉に任官する。明治28年の日清戦争では、従軍記者となった正岡子規に佩刀を授け、金州滞在中は宴に子規を招き、感激した子規が「陣中日記」に

行く春の酒をたまわる陣屋哉

の句を詠んでいる。

しかし、この二人の関係が外祖父大原観山が定謨を久松家へ迎える話の中心人物であったこと、また、叔父の加藤拓川が、内地にある時はフランス語の家庭教師として、フランスにあっては若い定謨の世話係として努力したことへの感謝を表したとも考えられる。

そして加藤拓川が松山市長として松山城の払い下げや、松山高等商業学校の創立に関しては、資金面その他で協力し、秋山大将の北予中学校長就任や万翠荘の建築にはこの三人と共に井上要・新田長次郎氏などの協力があったことも忘れることは出来ない。

秋山兄弟と子規・拓川そして定謨伯（さだこと）

⑧秋山真之（さねゆき）

秋山真之

海軍中将秋山真之は、秋山久敬（46歳）母サダ（42歳）の五男として、松山市歩行町に生まれた。

父は旧藩時代は歩行目付で、体もがっちりと大きく、人物も身体のように大きく寛容で衆望が厚かったという。

真之は少年時代、大街道にあった近藤元粋の塾に通い、小学校は子規と同じ勝山学校に通った。

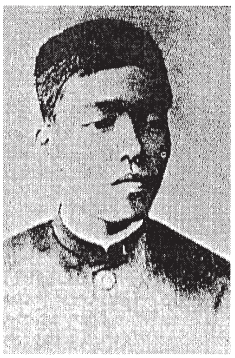
そして、小学校と棟を並べて同じ構内にある松山中学に入学した。

やがて明治16年、16歳の時、兄の好古に呼ばれて上京した。上京後は一つ橋の大学予備門に学び、そこでしばらく友人正岡子規と机を並べて下宿を共にした。

しかし、明治19年10月、海軍兵学校に入学し、明治23年に首席で卒業。海軍軍人として一生を歩み、日露戦争の時は名参謀として、日本を勝利に導いたのである。

特に「本日　天気晴朗なれど波高し」という電文は有名で、真之は海軍きっての名文家と言われていたのである。またこの日本海海戦で伊予水軍伝来の「T字戦法」をとり、圧倒的勝利を収めたのである。

⑨正岡子規


正岡子規

君を送りて思うことあり蚊帳に泣く

正岡子規が作ったこの俳句は、明治30年6月、秋山真之がアメリカ留学を仰せつかったと聞いて詠んだ送別の句であり、病床に呻吟する子規の気持ちがよく表れている。

秋山真之と正岡子規は、郷里松山での幼少時代からの親友であり、相前後して上京。上で述べたように神田の猿楽町の子規の下宿で一緒に暮らしたこともあるので、子規にとっては実に複雑な気持ちであっただろう。その頃、文学青年であった二人は仲良く寄席に通っていたという。

のちに、アメリカに留学している真之から、病床の子規に、やわらかい毛の入った軽い絹布団が送られて来たという。

子規が郷里松山の後輩に、「日本が世界で名高くなる時分には、松山が日本で名高くなるからの。」と言っていたというが、これは、「秋山は早晩、何かやるわい。」と信じると同時に、子規自身も「英雄は秋山と我」という気負いを持っていたのである。

四、松山の町を歩こう

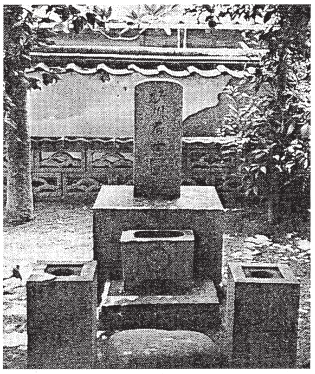
①お墓・記念碑・道しるべ

—道後鷺谷墓地—

秋山好古大将の墓

白川義則大将の墓

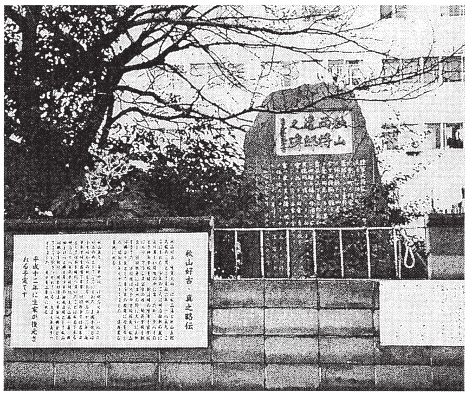
—拓川町相向寺—


加藤拓川市長の墓

②小説「坂の上の雲」の原点

—秋山兄弟の生家跡（歩行町）—

「赤ん坊（真之）をお寺にやるのはいやぞな。うち（好古）が勉強して、お金をこしらえてあげるがな」と父母に頼んだ逸話の残る家でもある。



●執筆者紹介●

上岡治郎（うえおか じろう）さん　生年月日　大正15・3・18
学歴　愛媛師範学校卒
趣味　読書・郷土史研究

昭和19・8　戦争の激化に伴い工場や軍隊に行き、終戦後教師となる。山や島や町の学校を歴任し、特に読書指導・作文教育・郷土教育に力を入れる。

出版物としては個人のもの無し。共著として「小田のむかし話」「日本新教育百年史」など。